

## 華佗の麻醉薬について

松木明知

1

演者が「麻醉」誌（一九八〇）上に、中国の名医であり東洋の麻醉術の鼻祖でもある華佗（後漢書、魏志には佗とあるが、宋代の文献には陀ともあり、中国においても佗と陀の混用が見られた。広辞苑にも華陀とある）がイラン系胡人であったとする説を紹介した。

これは「華佗」は中世ペルシャ語で「先生」を意味するファディ（*Fadai*）またはファダー（*Kiwada*）の音写と見做す説であり、従ってイラン系胡人（必ずしも一世とは限らない）とする伊藤義教京大名譽教授、井本英一大阪外国語大学教授の言語学的見地からの研究であった。

「後漢書」によれば、華佗は一名「專」とも呼ばれたとある。この字の当時の発音は「ファグ」「パク」であり、これは、中世ペルシャ語で、神を指す「ファグ」「バグ」を音写したものと解釈されるという。

これに対してももちろん中国側から反論が出たが、演者の研究などが契機となって一九八四年十月二十九日、華佗の生地とされる安徽省亳県では、華佗に関するシンポジウムが開催された。演者にも、講演するよう招待状が送られてきたが、折悪しく、パスポート申請中であつたため参加することは出来なかつた。

華佗とイラン的要素とを結びつけるのは、その名称の言語学的研究ばかりではない。

すでに約五十年前に江上波夫博士は華佗の医術とくにその全身麻醉術の中にシルクロード經由のイラン文化の影響の痕跡を認めているのである。

つまり華佗の麻醉術は、西域經由のイラン系幻人から伝授されたか、あるいはその術を看破して会得したものであり、大麻を使用したのであろうと述べている。

演者は従来中国由来と考えられた「麻醉」という語が、実は嘉永三年（一八五〇）の杉田成卿の「亜的耳吸入法試説」に初出することを指摘したが、このことは「麻」の有する意義を深く考える端緒ともなった。

華佗は「麻沸散」を酒と共に経口投与して全身麻醉を施行したという。このことから華佗は「麻」つまりインド大麻を煎じて投与して麻醉を行い、それから「麻醉」という言葉が生れたとする説が一般に行われている。

しかし最近の植物育種学的、薬理学的、民俗学的、歴史学的研究を総合すると、当時の中国の麻には、薬効成分としてのテトラハイドロカンナビール（THC）が含有されていなかったことが推定されるのである。さらにTHCは、これを経口投与してもすぐ胃酸によって分解され、効果発現は見られないことが多い。演者はウサギ、犬にTHCを経口投与したが、全く認めるべき麻醉、鎮静効果はなかった。

中国において先秦時代から植栽されていた「麻」は専ら、衣料、食料の用に供されるのみであって、華佗の時代にあってもその麻醉性の薬効に注目した例を史料中に見いだし得ないのである。

中国で麻の有する薬効性が注目され、一部医療に供されたのは主として唐代以降である。

このことから華佗の麻酔薬として「麻」以外にそれを求めなければならぬ可能性も生じてくる。華佗自身が「麻沸散」と称したか否かは定かでないが、その麻酔薬を「麻沸散」と称したのは「麻」を煎じて製った薬ということではなく、「麻沸」の状態を作り出す薬という意であると、演者は考える。

「麻沸」は、既に華佗以前に使用されていた語で、漢書王莽伝に「今江湖海澤麻沸、盜賊未盡破殄」とあり、「麻沸如乱麻沸涌」と注されている。つまり「麻沸」とは、非常に混乱して訳が分らなくなった状態を示したものである。

これは全身麻酔の状態、つまり興奮期を経て意識を失う状態に入る過程を如実に示していると考えられる。

従来華佗の麻沸散の本態をインド大麻とする説と曼陀羅花とする説とが平行して伝えられてきた。しかし前述の理由によって、もし華佗の中にイランの要素を認めないとすれば、インド大麻の可能性が少ないことになり、そうすれば曼陀羅花が用いられたことになる。

しかし後説は、確固たる理由もなく、単に漫然とそうではないかとして唱えられている説である。

曼陀羅花は洋の東西を問わず、古代から用いられてきた。中国では伝統的に曼陀羅花が用いられたようである。李経緯氏の研究によって今それを文献に求めると、寶材の「扁鵲心書」(一一四六)の「睡聖散」中に曼陀羅花が含まれている。

次いで危亦林の「世医得効方」、李時珍の「本草綱目」中に曼陀羅花が披見される。後者に見える「蒙汗薬」とは、曼陀羅花中に含まれるアトロピンの作用で汗の分泌が抑制されることを示しているのであろう。

このようなことを考慮すると、高嶺徳明によって元禄二年(一六八八)琉球に伝えられた麻酔薬も、その本態は、曼陀羅花を主成分とするものであったことが容易に想像できる。

華佗の「麻沸散」の本態は、大麻か曼陀羅花かのどちらかを主成分とするものであつたらうと推定される。

大麻とすれば、当時の中国の大麻にはTHCが含有されていなかったと推定されるため、少なくともイラン系胡人を通じてそれを入手したことになり、華佗の中にイラン系要素を認めないわけにはいかない。

一方、曼陀羅花は洋の東西を問わず、古くから麻酔薬として用いられてきた植物で、中国でも伝統的に用いられてきたもので、とくに宋代からはその使用が盛んになった。

可能性からすれば、曼陀羅花の方が可能性が高いと考えられる。もちろん附子なども併用されたかも知れない。いずれにせよこの問題の解決のためには、今後一層の研究を俟たなければならない。

(弘前大学医学部麻酔学教室)